「やれやれ、一体どこへ連れていかれると言うのやら……休憩所というやつか？」
「違うよ！」
声を荒げた僕に、スカサハはくすくすと笑っている。
楽しそうで何よりだけど巻き込まれるこちらとしてはたまったものじゃない。
「笑顔が可愛いから怒るに怒れないのがずるいなぁ……」
「……聞こえているぞ、マスター」
「えっ嘘やだ忘れて」
「忘れるものか。……このスカサハに可愛いとは。随分な物言いだな」
「ご、ごめん……そうだよね、スカサハは可愛いより綺麗ってタイプだもんね」
「……もうなんでもいいから急ぐぞ、マスター」
「え？　あ、うん……」
顔を俯かせてしまったスカサハと街を歩む。
参ったな、怒らせてしまっただろうか。
どうしたものか、なんて考えながら、僕はこの街に至るまでの経緯を思い出していた。